接触場面の会話に見られる「中途終了型発話」
—台湾人上級日本語学習者の場合—

陳　文敏

キーワード　*「中途終了型発話」、「統語的」要因、「談話的」要因、「心理的」要因、スピーチレベルぼかし*

1．はじめに

日本語の会話には「お名前は…」のように文法的に完結せず、言い切っていない表現形式が使われることがある。このような発話を宇佐美（1995）にしたがって「中途終了型発話」と呼ぶ。「中途終了型発話」についての研究は、これまでは日本語母語話者だけが対象となっており、接触場面（ネウストプニー1995）の会話を対象としたものは皆無のようである。そこで、本稿では接触場面の会話を資料とし、日本語母語話者と日本語学習者との間に見られる「中途終了型発話」の使用上の相違について分析する。

2．会話資料

会話資料は、1997年４月末～６月初めの間に名古屋市出身の日本語母語話者２名（男性１名、女性１名、以下、母語話者）と日本語能力が上級に達している台湾人日本語学習者８名（男性４名、女性４名、以下、学習者）[1] に依頼して収集した。会話参加者は、全員30歳前後の大学院生で、話し相手とは初対面である。表１に示したように、母語話者と学習者と二人一組で自己紹介から始めて自由に会話をしてもらい、計16組551分の会話を収集した。会話の後、アンケート調査とフォローアップ・インタビューによって、話し相手の属性についての判断、互いのスピーチレベシフトに関する言語使用意識等について確認した。

[1] 学習者は全員来日して２年以上で、日常生活やゼミで自然に日本語を使っていることから上級だと判断した。なお、８名のうち、５名（ＴＭ３、ＴＭ４、ＴＦ１、ＴＦ２、ＴＦ４）が日本語能力試験一級に合格している。

表１　会話資料の一覧

参加者	ＴＭ１	ＴＭ２	ＴＭ３	ＴＭ４	ＴＦ１	ＴＦ２	ＴＦ３	ＴＦ４
ＪＭ１	会話１ (54分)	会話３ (34分)	会話５ (28分)	会話７ (38分)	会話10 (67分)	会話12 (39分)	会話14 (42分)	会話16 (30分)
ＪＦ１	会話２ (29分)	会話４ (24分)	会話６ (26分)	会話８ (30分)	会話９ (25分)	会話11 (29分)	会話13 (27分)	会話15 (29分)

収集した会話資料はCHILDES（大嶋・MacWhinney1995）を用いて文字化及び分析の処理を行った。一発話を単位に分析を行うが、発話単位の認定に関しては陳（2000）を参照されたい。なお、文字化の記号は末尾の「会話例における使用記号」に示してある。

３．「中途終了型発話」の捉え方

本稿で言う「中途終了型発話」は、文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているものを指す。「中途終了型発話」は（１）複文の主節が省略されている発話、（２）述部が省略されている発話、及び（３）形式は「ダ体発話」に見えるが、音声的には「ダ体」と認められない発話[2]の三種類に分けられる（陳2000:129－130）。

従来「お名前は」のような述語が省略されている表現は「（述語／述部）省略文」（高橋1993、丸山1996）、「言い差し文」（丸山1996）などと呼ばれてきている。しかし、「省略文」、「言い差し文」という捉え方では、主節、または述語か述部が省かれている文や発話しか対象としないため、上記の（３）を分析の対象とすることができない。したがって、本稿では「中途終了型発話」という用語を使うことにする。

---

[2] 形式は「ダ体発話」に見えるが、音声的には「ダ体」と認められない発話には、例えば次のような例Ａがある。

例Ａ（会話７より）

⇒ＪＭ１：えー、人口、だいたいどれぐらいー＋...

ＴＭ４：2150万人いる<んですけど>。

こうした発話は末尾が平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話されるという特徴がある。なお、多くの場合、話し相手に質問する時に見られる。

4．「中途終了型発話」が生起する要因—母語話者の場合

会話資料を分析した結果、母語話者が「中途終了型発話」を使用する際、「統語的」要因、「談話的」要因、「心理的」要因の三つが関わっていることが分かった。以下、この三つの要因について例を挙げながら論じていく。

4.1　「統語的」要因

「統語的」要因で生起する「中途終了型発話」は、統語的に後続しそうな表現が推測できるので、省略されても意味が相手に分かってもらえる場合である。次の例１を見てみよう。

例１〔会話１より〕
　ＴＭ１：え、今、奨学金ないですか？
　ＪＭ１：えーと＋／.
　ＴＭ１：ドクター一年に＋／.
　ＪＭ１：えーと、申請だけ＜この前の４月＞［＞］＋／.
　ＴＭ１：＜××でしょう＞［＜］＋／.
　ＪＭ１：えー、だから、しているんですけど［うん］。
⇒ＪＭ１：それが取れたら、ちょっと買おうかなと＋...
　ＴＭ１：そうですか。
　ＪＭ１：でも、日本で買うと、40万とかしますからね。
　ＴＭ１：４、50万ぐらいかかりますね。
　ＪＭ１：そうですね。
　ＪＭ１：そうすると、もう奨学金なくなっちゃう［＝！笑い］。
　ＪＭ１：なくなっちゃうってことないですけども。
　ＪＭ１：相当負担が掛かりますからね［うん］うーん。
⇒ＪＭ１：ちょっと安いやつを探さないと、いけないなと＋...
　ＴＭ１：私も三月に買ったんですよ。

上の例１に見られる「中途終了型発話」はＪＭ１に二つあり、いずれも「～と」まで言って、後続表現として考えられる「オモウ」[3] が略されている。こ

[3] 「中途終了型発話」における省略されている主節や述部のスピーチレベルは「ダ体」にも「デス・マス体」にもすることができる。したがって、述語にあたる語をカタカナで表記し、スピーチレベルが明示されていないことを表す。

うした「～と」（または「って」）は、その後ろに来る述語は常に思考動詞の「オモウ」や「カンガエル」、引用動詞の「イウ」や「ツタエル」であり、言わなくても意味が相手に伝わるので、省略されて「中途終了型発話」になるのである。

この「統語的」要因によるものは、上述した「～と／って（オモウ／カンガエル／イウ／ハナス）」以外に、「～と／って（いうわけデアル／いうことデアル）」、「～なければ／なきゃ（ナラナイ／イケナイ）」などがあり、本稿の会話資料でも観察された。こうした「中途終了型発話」の使用は、言わなくてよいことを省略することによって会話の冗長性を減らすことに役立つと考えられる。

4.2 「談話的」要因

意味の理解に必要なコンテクストがあって生起するのが「談話的」要因に基づく「中途終了型発話」である。ここでいうコンテクストは、会話の流れ、一般常識や会話参加者の共通知識、話し相手からの理解を示す発話などが挙げられる。以下、それぞれについて例を挙げながら説明していく。

4.2.1 会話の流れ

次の例２は依存できる会話の流れがあって生起した「中途終了型発話」である。

例２〔会話14より〕

ＪＭ１：東京とか、学会とかで行くんですけど［はい］。
ＪＭ１：えーと、新幹線使わないで行くと、片道が５千円ぐらいでしょう、電車。
ＴＦ３：あ、普通電車＜ですか＞［＞］？
→ＪＭ１：＜うん、そう、そう＞［＜］そう、鈍行で行けば＋...
ＴＦ３：５千円、うん。

例２におけるＪＭ１の「中途終了型発話」は先行するＴＦ３の発話への答えでもあり、自分の言った話に対する補足説明にもなる。会話の流れによって依存できる先行発話があるので、述部として考えられる「片道で５千円ぐらいダロウ」が省かれて「中途終了型発話」になったと思われる。この例は、繰り返しを避けることによって、リズム感のよい会話になると思われる。

4.2.2　一般常識や参加者の共通知識

次の例３は一般常識や参加者の共通知識によって現れた「中途終了型発話」である。

例３〔会話４より〕

ＪＦ１：そういう子供たちの、どういうかかわりができるのかということを研究してるんで、だから、子供と遊んだりしてることも多いんですよ［うん］。

ＴＭ２：よく、カウン、カウンセルー？？

ＪＦ１：ええ。

ＪＦ１：カウンセリングもそうだし。

⇒ＪＦ１：もっとちいちゃい子だと[はい]言葉ではやれないので[えー]ちいちゃい子に何悩んでるのって聞いても［＝！笑い］＋...

ＴＭ２：［＝！笑い］。

ＴＭ２：本当に、何を、やん、悩んでると聞いた？

ＪＦ１：いや、き、ほとんど［うん］聞かないんで、ま、聞くこともあ、あるけれども。

ＪＦ１：遊び＃＜を通して＞［＞］えー、いろんな、あのー、心の中身を［はい］あのー、扱ってく。

上の例３において、ＪＦ１は自分の専門である臨床心理学について話している。ＪＦ１は学内の相談室でカウンセリングをすることがある。その対象が小さい子供である場合、ことばではなく、遊びを通して小さい子供の悩みなどを引き出して解決していくようである。直接小さい子供にことばで「何悩んでるの」と聞かないのは、聞いても「うまく答えられない」ということが分かっているからである。例３のＪＦ１の「中途終了型発話」「(前略) ～ちいちゃい子に何悩んでるのって聞いても」は、後続要素として来そうな「うまく答えられないダロウ」を言わなくても、話し相手のＴＭ２に発話意図は伝わる。話し手のＪＦ１の発話意図が伝わったことは後続するＴＭ２の発話から確認できる。

4.2.3　話し相手からの理解を示す発話

「中途終了型発話」が次の例４のように話し相手からの理解を示す発話によって現れる例も観察された。

例４〔会話２より〕

ＪＦ１：だから、Ａさんは同学年になるので、専攻はちょっと違うんですけど。

（中略）

ＪＦ１：だから、そうですね、ま、修士の時も同じしゅっ、私が修士の一年生に入った時、Ａさんも＜一年生＞［＞］＋／.

ＴＭ１：＜修士の一年生＞［＜］。

⇒ＪＦ１：＋，ええ、だったので、よくお話ししたり、一緒に話したり＋...

ＴＭ１：［そうですか］。

ＪＦ１：ええ。

ＪＦ１：研究室も近くなので、うーん＋...

この例４は、ＪＦ１と同じ所属でＴＭ１も知っているＡさんについての話である。ＪＦ１がＡさんとの関係を説明しているところに（⇒付きの「中途終了型発話」）、ＴＭ１が「そうですか」と理解を示す発話をしている（松田1988）。ＴＭ１の「そうですか」という発話によって、ＪＦ１は述部として考えられる「シタ」などが省略された「中途終了型発話」を使ったと思われる。

上述したように、本稿でいうコンテクストは、会話の流れ、一般常識や会話参加者の共通知識、話し相手からの理解を示す発話などを指している。いずれの場合も、意味理解のためのコンテクストになるので、中途で発話を終了しても情報の伝達に支障はない。こうした「談話的」要因による「中途終了型発話」を使用することによって、「統語的」要因と同じように最後まで言わないことで会話の冗長性を減らすという目的が達成できる。

4.3　「心理的」要因

「心理的」要因によって使用される「中途終了型発話」は、その省略されている部分を言ってしまうと話し相手に失礼になり、人間関係に悪影響をもたらすかもしれない場合に現れる。次の例５がこれにあたると思われる。

例５〔会話６より〕

⇒ＪＦ１：お名前は＋...

ＴＭ３：え、私の名前は、えー、ｗｗｗと書いて［はい］で、ｗｗｗです。

上の例5は話し相手の名前を聞き出そうとする例である。普通「お名前は」まで（最後の「は」の母音の「ア」を延ばし平板のイントネーションで）言って、話し相手からの返事を待つことが多い。それに続きそうな述部は「何デアルか」が考えられる。しかし、「～は何ですか」のような素朴で、直接的な質問は多くの場合失礼になると指摘されている（畠1989）。したがって、失礼にならないようにという「心理的」要因が働き、「ダ体」の「何」でも「デス・マス体」の「何ですか」でもなく、「お名前は」という「中途終了型発話」が選ばれることになると思われる。

上記の観察から、母語話者が「中途終了型発話」を用いる際、「統語的」要因、「談話的」要因、「心理的」要因が関わっていることが分かった。それをそれぞれの理由と目的とともに表2にまとめる。

要　因	理　　由	目　　的
統語的	統語的に復元できるので後続要素を略す	会話の冗長性を減らす
談話的	意味理解に必要なコンテクストがあるので後続要素を省く	
心理的	失礼にならないように言い切りを避ける	話し相手への配慮

5．　学習者に見られた「中途終了型発話」—母語話者との相違

学習者にも「中途終了型発話」が観察されたが、それは「統語的」及び「談話的」要因によるものが多かった。つまり、「心理的」要因に基づく例はほとんど見られなかった。また、学習者の中に形成されている独自のストラテジーによる例もあった。以下、学習者に見られた「中途終了型発話」の使用例と不使用例（使ってよいが使っていない例）を取り上げて、学習者と母語話者の間における「中途終了型発話」の使用上の相違について見ていく。

5.1　「中途終了型発話」の使用例

5.1.1　「統語的」要因と思われる例

「統語的」要因による「中途終了型発話」とは、後続要素が統語的に復元できるものである。学習者には次の例6～9のような例が見られた。(紙幅の関係で前後の文脈を省き、「中途終了型発話」にあたる部分のみを挙げておく。)

例６〔会話１より〕

ＴＭ１：じゃ、今度［えー］あいつに会ったら［＝！ＪＭ１の笑い］おめでとう＃と言わなくちゃ＋...

例７〔会話５より〕

ＴＭ３：ですから、もう少し今そのスピード［はい］うん、スピードじゃなくて、その計画を［はい］少し１年間ほどずれて［えー］で、一応博士課程に＜入ってから＞［＞］ゆっくり準備を進めようと［うん］＋...

例８〔会話10より〕

ＴＦ１：それも、なんか、あのー、なん、換える時は［えー］やっぱり両面コピーだから［うん］なんか、方向［うん］換えなきゃ［＝！笑い］＋...

例９〔会話12より〕

ＴＦ２：で、ここの、２、３年の経験［はい］うん、持ってか＜帰ろうかと＞＋...

上に挙げた「統語的」要因による「中途終了型発話」の例６～９は、母語話者の使い方と同じで、特に異なる使い方をしているとは感じられない。

5.1.2　「談話的」要因と思われる例

学習者に見られた「談話的」要因による「中途終了型発話」は次の例10がある。

例10〔会話１より〕

ＪＭ１：えー、じゃ、えーと、向こうの大学を出られて、すぐ、えー、しー、法律のコンサルタントを［はい］やってらして［＝！スー］ということなんですね。

ＴＭ１：そうです。

⇒ＴＭ１：いろんな分野で＋...

ＪＭ１：いろんな分野［うん］っていうのは、えー、どんな＜分野＞［＞］＋...

⇒ＴＭ１：＜あのー＞［＜］例えばね［はい］ち、知恵ざい財産権とか［財産権、うん］国際取り引きとか［はい］また、その、会社の管理とかね［うん、うん、うん］＋...

ＪＭ１：会社の管理－？？

ＴＭ１：そうです。

例10では、ＴＭ１が日本に来る前から台湾のある会社で法律関係のコンサルタントをしていることが話題になっているが、「法律のコンサルタントをしている」ということがすでに会話の中に出てきている。ＴＭ１はこのような参照できる会話の流れをもとに「中途終了型発話」を使っていると考えられる。したがって、学習者も母語話者と同じように「談話的」要因による「中途終了型発話」を使用していると言ってよい。

5.1.3　学習者の中に形成されているストラテジーによる例

本節では学習者が独自に形成したと考えられるストラテジーによる例を挙げ、母語話者との違いを説明する。まず、例11を見てみよう。

例11〔会話４より〕
ＪＦ１：え、戻ったら、研究やるんじゃなくて、ほかの＜仕事＞［＞］＋／.
ＴＭ２：＜あ、勉強＞［＜］はだいす、大好きだけど［えー］。
⇒ＴＭ２：本当に学者の、学者になって、一生に［えー、えー、えー］研究することは、まー、ちょっと［＝！笑い］＋...
ＴＭ２：だから、帰って＃［＝！スー］何というの＃高校の先生とか［あー、えー、えー］ほかの仕事をしたい。
ＪＦ１：あー、そうか。

例11におけるＴＭ２の「～ちょっと」という「中途終了型発話」は、先行した会話の流れから「考えてイナイ」という発話意図をＪＦ１に察してほしいという「談話的」要因に基づく例のように見える。実際、ＴＭ２にはそういう狙いもあるようであるが、主な理由ではない。「～ちょっと」で発話を終えた本当の理由は、「後ろに来るべき述部がうまく言えなかったので、それでごまかした」ということなのである（ファローアップ・インタビューにおけるＴＭ２からの説明）。つまり、ＴＭ２は「～ちょっと」をうまく言えない述部の代わりに使っているだけで、一種のストラテジーだと考えられる。したがって、こうした例は話し相手に察してもらいたいという「談話的」要因に基づくというより、むしろＴＭ２が独自に作り出したストラテジーによる側面が大きいのではないかと思われる。

次に「～と思って」のような「テ形」で発話を終えた例12を紹介する。

例12〔会話15より〕

ＴＦ４：あ、そうですね、伊勢神宮。
ＪＦ１：行ったー？？
ＴＦ４：うん、うん、初詣［あ］今年の初詣、行きました。
ＪＦ１：すごい人じゃなかったですか？
ＪＦ１：＜人出が＞［＞］＋／.
ＴＦ４：＜や＞［＜］そんなに多くないんですよ。
ＪＦ１：あ、そうですか。
ＴＦ４：うーん。
ＴＦ４：熱田神宮と較べると［えー］そんなに多くないんです。
ＪＦ１：あ、そうなんですか。
ＴＦ４：＜うーん＞［＞］。
ＪＦ１：＜私＞［＜］きっと伊勢神宮は熱田よりもずっと人が多いんだと思ってた。
⇒ＴＦ４：うん、私もそう思って［＝！両者笑い］＋...
ＴＦ４：でも、行ってみたら［うん］うん、そんなに多くないですよ。
ＪＦ１：あ、そうか。

上の例12におけるＴＦ４のような「テ形」の「中途終了型発話」はほかの学習者にも見られた。ファローアップ・インタビューで「～思って」などの現れについて聞いたところ、ＴＦ４が「「～と思って」は日本人もよく使っているようだから、そのままねをした」と述べている。したがって、ＴＦ４にとって「～と思って」などのような「中途終了型発話」は、よく耳にする母語話者の話し方をまねて自分の日本語に取り入れるという学習ストラテジーによって生起するもののように思われる。

しかし、この例12におけるＴＦ４の「～と思って」という「中途終了型発話」は誤用である。なぜならば、「～と思って」という「中途終了型発話」は、複文の主節が省略されうる場面にしか用いられないからである[4]。それは、ＴＦ４の「～と思って」という発話の前にＪＦ１が「～と思ってた」と言い切っていることからも伺える。つまり、ＴＦ４の伊勢神宮への初詣ということから、ＪＦ１は熱田神宮への人が多かったことを知り、「～伊勢神宮は熱田よりずっと人が多いんだと思ってた」と言って考え方を示している。それは複文の従属節ではないので、「～と思って（イ）タ」と言わねばならない。したがって、ＪＦ１に同調するＴＦ４も「～と思って（イ）タ」と発話すべきだと思われる。

上に挙げた例11と12から、学習者は独自のストラテジーによって「中途終了

型発話」を用いることがあることが分かった。しかし、学習者の中に形成されているストラテジーによる「中途終了型発話」は、必ずしも正しく用いられているとは限らないことも同時に伺える。

5.1.4　上昇イントネーションによって質問する例

本節では、「中途終了型発話」の音調について検討する。次の例13と14を見てみよう。

例13〔会話１より〕

ＪＭ１：向こうでは、もう、え、どんな職業に就かれようとかは考えてらっしゃるんですか？

⇒ＴＭ１：台湾に帰ったらー？＋...

ＪＭ１：ええ。

ＴＭ１：たぶん、たい、大学の先生に＋...

ＪＭ１：先生、あ、そうなんですか。

例14〔会話10より〕

ＴＦ１：＜ｗｗｗ＞［＜］さんはどうですか＜料理は＞［＞］？

ＪＭ１：＜僕は＞［＜］全然できないです［＝！笑い］。

ＴＦ１：え、そうですか。

ＪＭ１：ええ、僕は自宅＃だから、あのー、母親が［うん］作ってしまうんで、僕は何にも＜できないです＞［＞］。

⇒ＴＦ１：＜お弁当は＞［＜］－？＋...

---

[4] 複文の主節が省略されうる場合に現れている「～と思って」という「中途終了型発話」は、例えば次の例Ｂである。例Ｂにおける ＪＦ１の「中途終了型発話」は、「感心シタ」が省略されている主節として考えられる。省かれた原因は、「すごいなと思って」のと同じ意味内容の繰り返しを避けるためだと思われる。

例Ｂ〔会話13より〕

ＪＦ１：ちょっと違う分野だと［うん］９割、90パーセントぐらいが英語論文を読まなくちゃ行けない人がいて［うん］その人たちがすごい苦労してる［＝！両者笑い］。

ＪＦ１：××＋／.

⇒ＪＦ１：でも、ここでいつも話してる中国の方、みんな、台湾の方［うん］みんな＃スムーズに［＝！ＴＦ３の笑い］日本語話してるから、すごいなと思って［＝！両者笑い］＋...

ＪＦ１：自分が２年ぐらい［うん］たぶんアメリカ行っても［うん］そんなに英語しゃべれないと思うんです［＝！笑い］。

ＪＭ１：お弁当もないです。

上に挙げた例13と14はいずれも上昇イントネーションによる質問である。上昇イントネーションは質問の意図を表す一つの方法ではある（森山1989）が、母語話者には質問する際、上昇イントネーションの「中途終了型発話」を用いている例は見当たらない。そのような表現は、初対面の話し相手に失礼な感じを与えてしまいかねないからであると考えられる。したがって、失礼にならないように、母語話者は、例13のような場合には「ってことですか」を付け、例14のような場合には最後の「は」の母音の「ア」を延ばし平板のイントネーションで言って話し相手の返事を待つというのが普通であり、本稿の会話資料でも同様な例が観察された（例５におけるＪＦ１の「お名前は…」等）。こうした例は、学習者が失礼にならないように表現形式を工夫したり、音調を制御したりすることがまだできていないことを示していると思われる。

5.2 「中途終了型発話」にしてよいがしなかった例

母語話者とさほど変わらぬ学習者の「中途終了型発話」が見られる一方、母語話者なら「中途終了型発話」にするような発話を「中途終了型発話」にしていない例（つまり言い切っており、発話末が「ダ体」か「デス・マス体」かのどちらかになってしまう例）が学習者のほうに観察された。まず、次の例15におけるＴＭ１の発話を見てみよう。

例15〔会話２より〕
ＪＦ１：じゃ、私が英語をなかなか上達できないのも［そうですよ］しょうがないですね［＝！笑い］。
→１ＴＭ１：だから、アメリカとかイギリスに行かないと＃＋／.
ＪＦ１：［＝！笑いながら］行かないと無理ですか。
→２ＴＭ１：＋，身に、身に付けること、ことは難しいですよね。

例15において、ＴＭ１とＪＦ１は外国語の力を伸ばすにはどうしたらよいのかということについて話している。→１のＴＭ１の発話は「～行かないと」の後ろに少々ポーズ（＃）がある。話し相手のＪＦ１がその隙にターンを取ってＴＭ１の発話（→１）を完成させている。それにも関わらず、その後ＴＭ１は（ＪＦ１が言っている内容と同じ意味の）自分の考え方をはっきりと言ってしまっている（→２）。この発話（→２）は意味内容の繰り返しになるだけでなく、念押しに聞こえて、失礼な感じを与えるかもしれない。そうはならないよ

う、母語話者なら→２のところでは「そうでしょうね」、「えー」などと同調を示すだけで、ＴＭ１（→２）のように繰り返したり、自分の考え方をむき出しにすることは少ないであろう。

次に「統語的」要因に基づく「中途終了型発話」にしてよい例16を紹介する。

例16〔会話６より〕

ＴＭ３：で、まん、まんげつかまんつきか［＝！笑いながら］いばっ、いきなり、なんか、あのー＜出せなくなっちゃって＞［＞］［うん］わす、忘れなくなっちゃって＋...

ＪＦ１：＜わかんなくなっちゃって＞［＜］＋／.

→１ＴＭ３：やー、やっぱり歌わないと、下手になるだなって＃＋／.

ＪＦ１：そうですか。

→２ＴＭ３：＋，思ったわけですよ［＝！両者笑い］。

ＪＦ１：え、結構、じゃ、歌には自信を持ってたわけですね。

例16における→１のＴＭ３の発話は「～だなって」という表現の後にポーズ（＃）が入っている。「って」までで十分に自分の考え方を表しており、しかも、話し相手のＪＦ１が「そうですか」と理解を示す発話をしている。しかし、ＴＭ３はその後も「思ったわけですよ」と続けている（→２）。この発話における「わけ」と終助詞「よ」の使用は、話し相手に押しつけがましいという感じを与えかねない。したがって、そうはならないように、母語話者なら「～（だ）なって」まで言って「中途終了型発話」にするだろうと思われる[5]。

最後に、ＴＦ４とＪＦ１の共通の知人Ｂさんについての話がされている例17を見てみよう。

例17〔会話15より〕

ＴＦ４：Ｂさんは隣のクラス［＝！笑い］。

ＪＦ１：あ、そうなんっ××＋／.

ＪＦ１：じゃ、もう国にいた時から、お知り合いだったー？？

ＴＦ４：や、あんまり［あ］見たことないんですよ［＝！両者笑い］。

ＴＦ４：一応、うん＋／.

ＪＦ１：隣りのクラス＋／.

---

[5] 例16におけるＴＭ３の発話の「～下手になるだなって思ったわけですよ」の「だ」は文法的に誤りであるが、これを削除すれば自然な表現になる。

ＴＦ４：来てから［うん］あ、あ、うん、来てから、始めて分かったんだ［あー］うん。
→ＴＦ４：この人は隣のクラスの人だった［＝！両者笑い］。

この例17に見られる→付きのＴＦ４の発話は誤用と言える例である。それは、ＴＦ４の分かっている「内容」なので、「～だったとワカッタ」のように言い切らなくても、少なくとも「～だった」の後ろに「と」を付けるべきであろう。なお、当該発話は先行するＴＦ４自身の「ダ体発話」に続いて「ダ体」のままである。初対面の会話では「ダ体発話」の連続使用は丁寧さに影響する可能性があり、使用する際注意を要する[6]。

上に挙げた例15～17から分かるように、こうした「中途終了型発話」にしていない発話はその末尾が必ず「ダ体」か「デス・マス体」かのいずれになってしまう。そうなってしまうと、発話のスピーチレベルシフトが心理的距離の調節や人間関係に影響を及ぼすことになる。つまり、会話をする際、いつも「ダ体発話」か「デス・マス体発話」のみで、またその両者の切り替えだけでは、話し相手との心理的距離は「親」と「疎」の両極端で行われてしまい、馴れ馴れしい、乱暴、またはよそよそしい、丁寧すぎると受け止められることがありうるからである。こうしたことを避けるため、母語話者は「中途終了型発話」を使って、発話のスピーチレベルをぼかしているということが本稿の会話資料から確認できた。

一方、例15と16のようにいつも発話を言いきりにしてしまうと、その会話は長たらしくなり、リズムに欠けるように感じられる。そこで、母語話者は話し相手との心的距離の調節などを考慮して「中途終了型発話」を適宜用いていることが上記の観察から分かった。

6．おわりに

本稿では、日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者の初対面同士の会話を資料に「中途終了型発話」の使用上の相違について分析した。その結果は以下の四点にまとめられる。

Ⅰ．母語話者の「中途終了型発話」の使用には、「統語的」要因、「談話的」

[6] 初対面の会話において「ダ体発話」の連続使用は丁寧さから見てあまり好ましいことではないと思われるが、実際に観察されている。それはどのような場合で容認できるのかについては、さらに調査する必要がある。

要因、「心理的」要因の三つが関わっている（表２を参照）。

Ⅱ．学習者にも「中途終了型発話」の使用例が見られたが、主に「統語的」要因か「談話的」要因、あるいは独自に形成しているストラテジーによるものである。すなわち、「心理的」要因に基づく例はほとんど現れていない。

Ⅲ．上記のⅡ．からは、学習者には、話し相手に対する配慮が上手に言語化できないという問題が見えてくる。つまり、「中途終了型発話」を用いることで、スピーチレベルぼかしを行ったり、言わなくてよいことや言いにくいことを言わずに済ましたりすることができるが、学習者にはその目的で「中途終了型発話」を使いこなすことがまだできていないように思われる。

Ⅳ．日本２年以上滞在し、日常生活やゼミで自然に日本語を使っているにもかかわらず、学習者は「中途終了型発話」を始め、「心理的」要因による言語表出の制御がまだできていないことが分かった。これは、「心理的」要因に基づく言語表出の制御の習得が非常に難しいことを示していると思われる。

付記：本稿は、2000年10月８日、名古屋外国語大学にて行われた2000年度日本語教育学会秋季大会における口頭発表の内容に加筆・修正を施したものです。発表の後いろいろ貴重なご助言をいただいたことを、ここに記して感謝申し上げます。

会話例における使用記号

・会話参加者は、三つの記号で区別する。初めの記号は国籍でＴは台湾を、Ｊは日本を表している。次の記号は性別でＭは男性を、Ｆは女性を表している。最後は通し番号である。

・発話末の記号

。	基本的な発話末記号。
？	情報を要求する発話を表す。
＋...	言い切っていないが、言い終わっている発話を表す。
＋／.	言い切っても言い終わってもいない発話を表す。

・発話の重なり記号

重なった部分は＜　＞で括り、以下の記号で重なった箇所を示す。

［＞］	次の話者の発話にある＜　＞で括った部分との重なりを表す。
［＜］	前の話者の発話にある＜　＞で括った部分との重なりを表す。

・その他

＋,	一度中断した発話が継続することを示す。発話の最初に表記する。
－？	上昇イントネーションの末尾を示す。発話末記号の前に記す。
#	ポーズを表す。
［　］	話し相手のあいづちを表す。
［＝！χ］	非言語行動の「笑い」や「吸気（スー）」（＝χ）を表す。
××	聞き取れない箇所を表す。
ｗｗｗ	プライバシーを保護するため、人名や団体名などの代わりに使う。ただし、本文の中で説明する場合、Ａ、Ｂなどのアルファベットで示すことがある。
⇒	注目されたい「中途終了型発話」を示す。話者記号の前に付ける。
→	注目されたい「中途終了型発話」にしていない発話を示す。話者記号の前に付ける。

引用文献

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能―」『学苑』662号　昭和女子大学近代文学研究所　pp．27－42

大嶋百合子・Brian MacWhinney編（1995）『日本語のためのCHILDESマニュアル』McGill University

高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』第12巻第10号　明治書院　pp．18－26

陳　文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話―表現形式及びその生起の理由―」『言葉と文化』創刊号　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻　pp．125－141

ネウストプニー，Ｊ．Ｖ．（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店

畠　弘巳（1989）「「これは何ですか」の社会言語学―日本語教育にみるきまりことば―」『日本語学』第８巻第２号　明治書院　pp．36－49

松田陽子（1988）「対話の日本語教育学―あいづちに関連して」『日本語学』第７巻第13号　明治書院　pp．59－66

丸山直子（1996）「話しことばにおける文」『日本語学』第15巻第９号　明治書

院　pp．50－59
森山卓郎（1989）「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』明治書院　pp．172－196